

## 学生企画

# 研究室訪問・白取祐司教授インタビュー

白取祐司（しらとりゆうじ）

1952年生まれ 北海道札幌市出身

1977年 北海道大学法学部卒業、  
同年司法試験合格

1979年 北海道大学大学院修士課程修了

1981年 司法修習修了

1984年 北海道大学大学院博士課程修了  
（法学博士）

現北海道大学名誉教授、

神奈川大学法科大学院教授

趣味は落語



## 法学部に入ったきっかけ

学生 「それではインタビューを始めたいと思います。よろしくお願いします。」

白取 「はい、よろしくお願いします。」

学生 「では、まず初めに、先生は法学部に入っていますが、法学部に入られた理由は何だったのですか。」

白取 「実は、当時は大学によっていくつか仕組みが違うんですが、北大も文類という大枠でとって、教養のときに振り分けるんですね。本人の希望と成績で振り分ける。だから、僕は文系がいいかなって漠然と思っていて、文系の中では、当時それほど流行っていなかったのですが、心理学がおもしろいかなと。それから法学もおもしろいかなと。というぐらいでしたが、最終的には法律にしました。理由の一つは、当時、学資を出してしてくれた父親に法律の方が実学というか、将来的にご飯を食べていくうえで、堅実だろうと言われて。幸い、当時、教養の法学の授業がけっこうおもしろかったんですね。それに対して、心理学の授業が、比べると

若い先生で、あまり内容がなかったですね。それも法律の方にいったきっかけの一つです。文類に入って、一年半で進路を決めるんですけど、途中からもう一年半待たないで法律の方にいこうかなと思いました。」

学生 「今の東大のように、教養学部で2年間勉強して、その後に専門で分かれるようなシステムに昔の北海道大学もなっていたんですね。高校生のころは文系にこうと考えていて、大学に入ってから法学を勉強しようと思ったのですね。法学でおもしろいと思われたきっかけというか、先生が興味を持たれたというのは、ベテランの先生がいらっしゃったということなんですけど、そのお話を聞いてどんなことがおもしろいなって思われたんですか。」

白取 「細かいことは覚えていないんですが、簡単に言うと、法律というのは決まりというルールをしっかりと立てて、ルールを守るというような、割と固いものだと思っていたんです。出発点はそこなんですけど、利益衡量があったりして、法律って意外と柔軟だということと、そ

れから、たとえば憲法問題であれ、刑事・民事であれ、学生が知り得ない社会のいろいろな事象が対象になるので、法律の向こう側にある社会というか、学生からみると知らない世界があったというのが、今思えばあったかなと。」

#### 司法試験を目指したきっかけ

学生 「法学の方に進まれるということになって、司法試験に合格されていますが、具体的に何か目指されたきっかけみたいなのはあったのでしょうか。」

白取 「どこの大学でもそうだと思うのですが、当時の法学部でも、言ってみれば、クラブ活動をやる層というか、思いっきり遊ぶぞという層と、割とまじめに勉強するぞという層に分かれていました。いわゆる勉強グループは、先輩の弁護士がついて勉強会をやっていたんですね。今でいうと人権派の弁護士の先生なんかが、やっぱりそういう人たちを育てたいという気持ちもあったと思うんです。

僕は最初、そのグループに入らなかったんですが、当時、『近代における債権の優越的地位』という我妻栄の有名な本があったんですが、そういうのを一年生でやっているグループなんかありました。それは、司法試験にいきなり入るのではなくて、少し法律のトレーニングをしてから、ということだと思いますが。

私自身は、父親が法学部へ入れというのがあって、司法試験を受けろというのも父親のサジェッションではあったんですね。で、大学一年生のときに、今でも持っていますけども、団藤重光先生の『刑法綱要総論』を買ってきて読んで、それまたおもしろいなというふうに思ったのは覚えています。実際、司法試験のグループに入って勉強を始めたのは、大学三年生ぐらいのときかな。」

学生 「ということは、司法試験を目指そうというよりも、法律の勉強をしていく過程の中で、司法試験があったという感覚なのですね。」

白取 「割と身近に勉強のグループがあって、

誘われて、じゃあやってみるか。そういう感じだったでしょうね。」

学生 「では、司法試験というか、弁護士になろうと思われて、司法試験の勉強を始められたという感じではなかったということでしょうか」

白取 「よくこう、美しい受験生ストーリーで、父親の会社が倒産しました、そこで弁護士に助けられましたというのではなくて、当時の北大の勉強していた連中ってのは、本格的な論文まではいかないんだけど、司法試験委員の書いた評釈などを読んだりしてたんです。当時は、予備校の教材とかテキストとかがほとんどない時代だったので、今よりアカデミックな要素を強くしたような勉強の仕方だったんです。だから、法律の勉強をする中で、法律の勉強と司法試験の勉強が相当重なっていたなという感じがしますね。」

#### 学生生活

学生 「では、学生時代についてのお話をお聞きますが、具体的にどんな学生生活を送られてきたのか。今のお話を聞くと、やはり勉強が中心という感じだったのでしょうか。」

白取 「教養の2年間というのは、ちょっと中途半端で、クラブ活動などもやっていたんです。私、落研に入っていたんですよ。クラブ活動というのは、北海道弁かな、「どっべる」というんですかね、留年したり、単位をいっぱい落とす方が、部活の中ではけっこう箔がつくというか。成績優秀で、階段をきちんと上がっていくよりは、寝坊して試験受けられなかったよ、という話の方が幅をきかせる雰囲気があって。ちょっとカルチャーが合わないなってだんだん思うようになってきて。それで、2年間やって、法学部の先輩に「やめようかと思う」って相談したら、「やめた方がいい」って言われて。当時の人達と今でも仲はいいんですけどね。そうやって辞めた落研の顧問もやっていたんですけど、この間まで。

学生生活後半は、当時北大っていうのは、司法試験が結構難しかったので、一流大学はともかく、北大ぐらいだと、現役合格ってほとんどいなかったんですね。現役も一人二人なんだけど、それも留年を2年間して、6年間でやっと現役で、卒業してから卒1とか言い方するんですが、6年間の現役の後半、あるいは卒業して1, 2年で受かるのが優秀な方という時代だったですよ。

私は自宅生だったんですけど、私の勉強方法として、たいてい夜6時からゼミをやりました。だから、昼間はゼミの準備ですね。ゼミは、毎日、6時から9時くらいまでやってました。

特に覚えているのは、民法の我妻栄の総則からずっと、債権各論まで毎日何十ページって決めて、それを読んで内容を理解するっていうようなことです。そのほか、商法が苦手だったんで、合格する直前ぐらいの年は、商法の最高のゼミをやるってことで、後輩とかできそうな人達を5, 6人集めてゼミをやっていました。

あと、当時、択一も難しかったので、択一のゼミをやるって、やってみたりしたこともありました。レジュメを作って報告して、それについてやりとりをとかですね。

今と違うのは、法科大学院がなくて、予備校もせいぜい答練を一部の予備校でやってるぐらいだったんです。まだ早稲田司法試験セミナーができる前だったんですね。その後、早稲田セミナーが一気に予備校界で頭角をあらわして、その他いろいろ後発組が出てきたりしましたが、当時、予備校はせいぜい、真法会が『受験新報』を出していて、通信で受験指導をやっていたというぐらいでした。

受験勉強は、幸いなことに、北大には北法会という受験の組織があって、現職の北大の先生方が、出題と解説と添削と全部やってくれる。合格してから僕も作りましたが、合格者が頑張っていて、択一の模擬問題まで作ったりしていたので、そういうのもやりました。つまり、北法会で答案練習をやり、普段の勉強はグループで

夜6時から。ゼミ室は、たいていグループで押さえられちゃって。だから、ゼミ室を押さえるために朝早く行って、鍵を借りて、そこを確保する。僕らは、みんな朝9時ぐらいに図書館に行き、場所も大体占めちゃうんですね。固定席ではないんだけど、事実上固定というか。図書館は当時、9時開館だったんですが、朝9時前に行きました。それから6時のゼミが始まるまでずっと、9時間ぐらい。まあ食事には2回出ますけど。夕食を食べて、ゼミが6時から7時の間に始まって、9時10時くらいまでやって帰る。家には寝に帰るだけみたいな感じでした。

学生「今、勉強の関係で興味深いお話を聞かせていただいたのですが、昔は司法試験予備校がなかったんで、勉強の中心となると、やはり基本書を読むことが中心となると思います。ゼミでは、どのようなことをやられていたのですか。知識を確認するという形が中心だったのですか、それとも問題を解いてみたりするようなのが中心のゼミだったのですか」

白取「勉強には、やはりプロセスがあるんですよ。最初は、先輩の教えがそうだったんですけど、理解して覚えるっていうのが大事だった。先輩がチューターになって、我妻栄の『民法講義』を20頁読んでくるように言われて、本を裏返して、いろいろ質問されてね、ちゃんと覚えているかどうか、理解しているかどうか、というのをやりました。それから、もちろん、階段をゆっくり上がるようなもので、レベルが上がってくると演習本もやりました。たとえば、商法でいうと、有斐閣の『商法演習』なんかをやりました。

ただ、演習本といっても、レベルの高いものから低いものまでいろいろあります。論点を細かく細かく切って、一つの論点についてささと解説しただけのものはあんまりおもしろくないんですよ。ある程度事例を最初に置いて、解説も、比較的丁寧な解説があるような演習本をやりました。過去問もやりましたが、主には演習本をテキストに使って、それでみんな

でやるっていう感じで。」

学生 「では、その学者の演習本的なものを演習の中心としてやっていたっていう感じですか。」

白取 「そうですね。今でもそうですけど、民法が比重的に大事だし、難しいですよ。だから、名前を言うと、星野英一先生とか石田穰先生の判例評釈が法学協会雑誌の後ろとかに載ると、重要な判例については、それをコピーして読んだり、ゼミでも使ったかな。」

学生 「やはりそういう基本書であったり、演習書を中心にゼミをなさっていたっていう感じになりますかね。」

白取 「そうですね。」

#### 研究者への途

学生 「その後、大学院の方にいかれて研究者の方を目指されるということになると思うのですが、具体的に何かきっかけみたいなのはあったのですかね。」

白取 「当時、北大に能勢弘之という僕の恩師がいたんです。あんまり自慢できるような動機ではないんですが、勉強会の方を受験勉強の中心にして、楽をして卒業の単位をとりたかったんです。当時ゼミは週に一回だったんですが、6単位もらえたんですよ。司法試験の勉強をしていると、ゼミに出るのは非常に楽なわけです。ある程度勉強やってますから。それで、その先生のゼミに2年間出させてもらって、結局、12単位もらったんですね。その後、一人の先生のゼミで12単位っていうのはダメだ、っていうふうに制度が変わるんですけど。私は、当時は両訴選択だったので、両方とるぞって頑張って、民訴のゼミも取って、6単位もらいました。それが4年生のときかな。」

能勢先生というのは、学生に対して大変ウェルカムな先生で、よく一緒にお酒を飲んでました。先生が、助教授から教授になった頃だったと思うんですが、頭の切れというか、非常にシャープな方で、知的な刺激を大変受けました。

その先生が、実は、強く大学院に來いと進めてくださって。最初は大学院で司法試験勉強していいという話が、だんだんに学者になれ、後継者になれっていう話に移行していったというのがありました。だから、すごく人的な要素が強かったんです。弁護士になっても私は全然困らなかったというか、それはそれでよかったんですけど。こんなふうに、個人的な要素で大学院に進みました。」

#### 研究テーマ

学生 「研究者目指されたっていうのは、かなり後半の方で、しかも、師匠である先生の勧誘からなのですね。その中で、先生は、刑事訴訟法のテーマとしてどういうものに最初興味を持たれたのですか。」

白取 「若いころから、よく「今どういうテーマで研究しているのか」って言われて困ってました。私の場合は、テーマというよりは、刑事訴訟法全般についてやってきたという感じですね。それは一つには、やはり司法試験の勉強をしてきたっていうのが関係するような気がします。要するに、あまり、それぞれの科目について好き嫌いしていると、司法試験って受からないじゃないですか。だから、刑事訴訟法の場合でも、全般的に目配りしないといけないと思っています。」

ただ、母親の友達のご主人で渡部保夫という裁判官がいらっしゃったのですが、僕が受験生の頃から、ご指導を受けていました。で、その方が、私によく、「事実認定が大事だよ。」って、おっしゃってました。だから、テーマをあえて言うとなると、あまり大したことはできなかったんですが、事実認定についてですかね。それからもうちょっと言うと、誤判・冤罪です。そういう問題については、ずっと関心があって修士論文は、自由心証主義をやったりというもの、やっぱり事実認定が、まあ、底を流れる関心事みたいなことになりましたか。」

学生 「事実認定というと刑事訴訟法を勉強

していて難しいなって思う、特に司法試験レベルでもどういう事実をどう評価していくのかというのが難しいなって思うのですが、すごく受験的な話かもしれませんが、事実認定がうまくなるコツとか、もしくは勉強する方法で法科大学院生ができるようなものは何かあるのですか。」

白取 「まず、旧司法試験の時代は、事実認定は不要でした。当時は、司法研修所での修習が2年間あったんですが、司法研修所に行くと、事実認定のトレーニングをかなり初めの方からやるんですよ。起訴状から始まって、逮捕とか勾留の、ちょうど仁平先生（本学教員）が時々配って下さるようなものと、プラスとして供述調書が入って、だいたい一冊与えられて、これでお前判決書けと。自白調書もあったりするんですが。あと、検察の授業の場合には、不起訴裁定書とか起訴するときの論告みたいなのを書けとかです。弁護だったら弁論とかです。それを4ヶ月トレーニングして、実務修習行ったらまさに事実認定をやるわけですよ。生の事件でそれをやるんですね。だから、旧司法試験の時代は、非常に明快で、受験生に事実認定は全くいらなかったんですね。研修所に行ったら、理屈の方は当然分かってるだろう、法律の理屈は本読めばできるだろうと。旧司法試験の合格レベルってそういうもんだというふうに共通認識があったと思うんですね。だから、そこから始まる。しかし、法科大学院の時代になって、ちょっと悩ましいのは、初期のころの理念では、4か月の前期修習をやめてその分を法科大学院が受け持つということになっていました。しかし他方で、司法試験の合格率が、当初の話と違って、低く抑えられてしまったために、法科大学院で事実認定教育っていうのが、余裕を持ってやれなくなったんですね。あえていうと、事実認定的発想っていうのは、刑法でも刑訴でも、あるいは民事でもあった方がいい。どういう状況証拠からどういう事実が認定されとかね。大枠について最小限の理解とか、発想っていうか、あった方がいいと思います。しかし、

単純に今の司法試験に受かるためだけであれば、事実認定っていうのはほとんどいらないうてますね。」

学生 「じゃあ、今でもそれほど旧司法試験時代と変わらない勉強法で問題ない」と

白取 「構わないと思います。」

学生 「よく『司法試験では事実認定が重要だ』みたいなことを言う人たちもいると思うのですが……」

白取 「もしそうだとすると、そこで言われるレベルって、かなり低いレベルの話で、そのくらいだったら、たとえば、実務家の先生方との実務系の演習でのやりとりで大丈夫です。どうしても気になるのであれば、事実認定についての薄い本、例えば石井一正先生とかの本が出てますよね。それを大事なかなと思うようなところをチェックするだけで僕は十分だと思います。」

学生 「分かりました。今注目されてるテーマがあれば、何かありますか。」

白取 「ご質問から外れるかもしれませんが、僕の研究で人に誇れるような素晴らしいものはないんですが、僕自身の研究の特徴として、比較法、特にフランス法を一生懸命やってきたというのがあったかなと思います。

『フランスの刑事司法』という本を3年くらい前に出したんです。フランス法をやっている法制史の先生方が、そういう本を出したり研究したりすることはあると思いますが、日本の実定法学者が、まとまったものを出すのは珍しいと思います。

その背景を申し上げると、私は良くも悪くも、研究者として非常にローカルな育ち方をしてきたんですね。特に学者として、北大という、ある種特別なところで育ちました。地方の旧帝大ということもあって、ポストに余裕があるんですね。例えば、ドイツ法とか、フランス法とか、ローマ法とか法社会学の先生が、私大に比べて沢山いらっしゃいました。そのおかげで、大学院で勉強するときに、先生方もやっぱり余裕が

ありますので、丁寧に比較法とか、外国の文献の講読をやってくださいました。僕はフランス語で入ったのですが、大学院生は英語はもちろん、フランス語とドイツ語をやらなければいけないという空気がありましたね。私も独仏語を勉強しました。

また、一人前の学者になるためには、当時の空気、二年間留学するのが当然であるというのもありました。私は司法修習が、留学みたいなもので、これでいいかなと思っていたのですが、89年に北大に呼ばれて戻る時に、留学させてやるぞと。昔の国立大学は、余裕があって、二年くらい当たり前で行かせてもらえたんですね。それで、相当頑張って勉強して留学生試験に受かって、90～92年まで、二年間フランスに留学しました。

私、実務家になるか学者になるかって分かれ道で、結局、学者になったんですが、学者になってよかったと思う理由の一番が、フランスとのつながりなんですね。

最初二年間行って、その後、また一年間だけ留学させてもらって、そのほかに私費であれば、サバティカルっていう形で留学に行ける。私が行ったボワチエ大学から、客員教授で時々、一か月くらい呼んでくれるんですね。プライベートな面でも、先生方と親しく交流しています。

研究テーマということからは、さらに離れていきますが、かつてと比べると刑事訴訟法という科目が、司法試験や法科大学院において、ずいぶん重要なものになってきましたね。旧司法試験の時代、刑事訴訟法は、選択科目だったのが途中で、訴訟法が大事だということで、民訴、刑訴の両訴必修になりました。そして、法科大学院の時代になると、訴訟法はさらに重視されるようになりましたね。なので、今は、法科大学院に実務家の先生もいらっしゃって手続法を教えてらっしゃるんですね。

それから、実務とのつながりという点で、私は、司法修習をやったことで、学者としてずいぶん得をしたなって思います。事実認定との関

係でいうと、いくつか個別事件の事実認定に関する論文を共同で書いたり、個人的に書いたり、意見書を頼まれてとかしてるんですが、2年間の修習時代に得たものっていうのは、どうやって調書が作られるのかを、実際に体験したことです。裁判修習では事実認定もしました。

最後に、刑事立法で大きな問題が出てくると、研究者が共同で、批判的立場から意見表明することも少なくないと思いますが、私もよく「呼びかけ人」になったりしています。研究テーマというのとは違いますが、これも学者の役割のひとつだと思うからです。」

学生 「刑事訴訟法という、英米に行って研究したり、もしくはドイツに行って研究したりする人が多いように思うのですが、フランスに行かれた理由とか、興味を持たれた理由はあるのでしょうか。」

白取 「私の大学での第二外国語が、フランス語なんです。だから、大学院に入るときも、当時は二か国外国語が必要で、フランス語だったんですね。ドイツ語も、修士の一年のときに一応辞書を引きながら読めるようになりました。

それはともかくとして、博士課程に入ったときには、ドイツ法の刑事鑑定の評価の問題をやりたいと思ったんです。ですが、そのときに、先ほど申し上げた能勢先生がフランスの一事不再理をやれって私に命じたんですね。能勢先生の直感で、フランスの刑事訴訟法って本格的にやる人がいなかったんだけど、基礎理論でもしろいことがあるはずだ、と思われたんでしょうね。それで、私はドイツ語をやる覚悟でいたんだけど、フランスの一事不再理についてやるようになりました。

それがフランスとの機縁だったんですが、当時、フランス刑事訴訟法は非常にマイナーだったんですね。その理由は、日本の刑事訴訟法の、特に解釈に役に立つかっていうと、制度が違いすぎて役に立たないっていう見方が通説だったんです。とりわけ、私訴とか予審とか、フランス流の陪審制度があったりして、ずいぶん日本



と違うじゃないかと。それからガルダビュー（警察留置）もあったり。修士課程の時に、フランス憲法をやっている中村睦男という先生がいらっしゃったんですけども、その先生と一緒にフランス語の人権の本を読んだら、フランスってというのは、刑事手続における人権が、本当にとんでもなく酷い状態だという話で終わっていて。こんな国を勉強して大丈夫かな思っていたんです。ただ、フランスでは、この数十年で、ものすごいスピードで人権について、日本でいう適正手続を守るための改革っていうのが、何度も行われました。

それから、フランスの陪審制は日本の裁判員制度とほとんど同じなんです。刑務所改革のときもフランスが参考にされて。ご存じかどうかかわからないけど、PFI方式っていうのは、フランスモデルなんです。そういった意味で、日本とフランスの刑事法の間には、ものすごく距離があったんだけど、この二、三十年の間にずいぶん近づいた。その一端を先ほど申し上げた『フランスの刑事司法』で紹介できたっていうのは、ラッキーだったなと思います。」

学生 「フランスというと人権の国っていうイメージがあるんですけども、先生が研究を始めた頃、それほど刑事司法について、酷いって言われていたのには、何か原因があったのでしょうか。」

白取 「ドイツ、フランスっていうのは元々官僚の国なんです。英米、特にイギリスは、国家権力が成熟していないために、検察官制度すらなかった。近年までなかったですよ。今の検察官制度も弱いものです。そういった意味では、権力集中型じゃないんですよ。当事者主義っていうのはある意味、必然なんです。フランスは官僚制で職権主義なんです。日本の官僚制はフランスをまねたものだと言われてますよね。もともとそういう地盤がある。人権っていう概念は、当たり前前に保障されている国であれば必要ないでしょう。だから、人権は、強い権力が人権を抑圧する状態になって初めて人

権っていう発想なり必要性・必然性が出てくる。といった意味で、ある種よくいえばダイナミズムっていうのかな、フランスは、共和制と帝政を何度か繰り返してますよね。共和制だって、今は第五共和制ですから。」

#### 神奈川法科大学院生へのメッセージ

学生 「興味深いお話を聞かせていただきました。そろそろ時間も迫ってまいりましたので、最後に何か神奈川大学法科大学院生へのメッセージをよろしくお願いします。」

白取 「昔、司法試験の受験生の時によく思っていたんだけど、司法試験に受かるためには半分は精神論だと。だから技術とかね、どの基本書がいいかっていうのはあるんだけど、とりわけ、合格まで少なくとも精神論が重要であると。自動車の運転免許試験と違って、司法試験は年に一回しかないじゃないですか。もし落ちたら、次までのものすごく期間が長いね。これが特徴なんです。長いということは気持ちを維持していくのが非常に大変です。それから、やらなきゃいけないことを一定のレベルでコツコツやっていくというのも非常に大変なんです。」

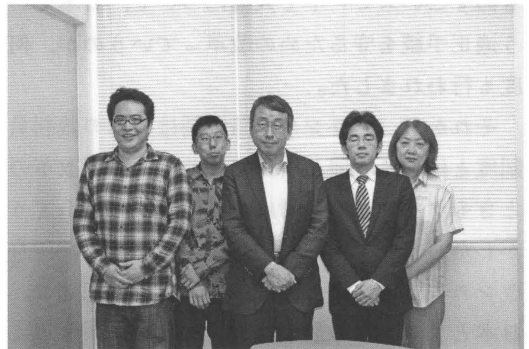
最初の勤め先だった私立大学の時に法職課程を作って苦労したけれど、苦労の一番の理由っていうのは、勉強癖ついてない学生たちにどうやって勉強してもらうか。それは、やっぱり精神論なんです。勉強癖っていうのを、もし不十分であればつけていかなければならない。それはもちろん、いろんな自己啓発の本に書いてあるみたいに、あるところまでいったらご褒美をね、ちょっとつけて頑張るとか、いろんなやり方あると思う。我慢して苦しめばいいってもんじゃないんでね。でもやっぱり、精神的なものです。

私の経験ですが、司法試験の試練を乗り越えるとね、その後の人生が楽になるし、自分にとっていろいろとプラスになります。私の場合、司法試験受かった後で、学者のトレーニングっ

ていうのが始まるんだけど、司法試験と比べると、非常に楽だったですよ。司法試験もそうなんだけど、要は集中力×時間でしょ。一晩徹夜すればいいってものでなく、ほどほどの集中力で、しかし時間もかけないといけない。大学院といっても、一流のところはわからないけど、北大くらいだと、のんきな人たちが少なくなかったような気がするんです。私はそれこそ司法試験並みの態勢で、朝から晩までフランス語の文献読んだりしてたんです。そうしたら割と、何とかなるんですよね。だから、司法試験のあの大変さを経験して乗り越えたっていう自信、プラス多少のノウハウみたいなもの、ノウハウっていうのはいま言った特に精神論以外の部分でのものですが、後で役に立つんです。やれたっていう達成感は、何事にも代えがたいので、余裕で受かる人は別だけど、もしみなさんがね、余裕では受からなくて、相当頑張んなきゃ受からないレベルだとしたら、自分の問題

として、精神論をね、きちっと自分なりによく考えて組み立てて、それを実践して乗り越える。それができたら、そのあとの人生、何をやろうとね、実務家になったって、いろんなことが待ち構えているわけですよ。そのときに大きな糧というか、力になるので、そう思って頑張っていたければなと思っています。」

学生 「分かりました。今日はありがとうございました。」



(2015年8月4日)